



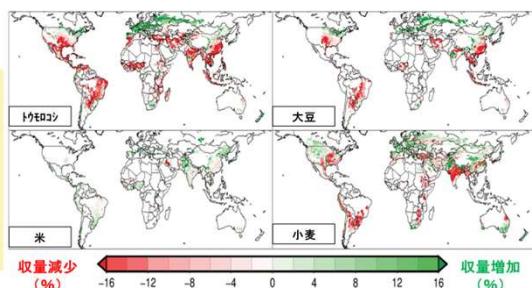
農作物生産における気候変動緩和策 —保全農法推進の提言—

チーム名：気候変動対策

メンバー：村田 憲彦、山田 淳吾、山科 宏幸、鈴木 一眞、水野 薫

アドバイザリー講師：薄井 智貴、村野 宏達、石井 陽佑

現状の把握



気候変動で穀物の収量が減少も
不測の事態に対応できない自給率

20年後に向けた提言の概要

農作物の被害の最小化

保全農法の推進

- 土をかき乱さない（不耕起栽培）
クリンバー、不耕起播種機
不耕起播種機
- 土を覆う（カバークロップ）
有機物マルチ カバークロップ
面積の3割以上
- 多様性を高める
少なくとも3種以上
輪作 混作

提案の内容

1:不耕起栽培
2:カバークロップ



提案実現のための具体的な取組 (アクションプラン) と実現可能性

課題①土壤の回復に1, 2年かかる（3原則の適応）
課題②設備がない。導入費用が掛かる
課題③土を掘る事が常識・保全農法の知識不足

	項目	愛知県	農家
保全農法メリット	表土流出防止 保水力増加 地温の安定 作物の生産量の増加 炭素の貯留が可能 化学肥料の使用量減少（窒素肥料） おいしくなる	◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

2024	2025 - 2029	2030	2040
①土壤改善 カバークロップ導入 有機農業の支援 ②設備製作（支援） ③意識改革（教育）	J-クレジット制度整備 ↑ 土壤センシング 炭素量を簡単に測る	25% 切替 農業 教育 見直	50% 切替

波及効果

炭素 1 ton当たりの削減費用: 100 ドル以下
年間平均削減量 : 34億トン/CO2 (世界)

不耕起栽培により、炭素貯留が可能
愛知 74,000ha ⇒ 34万7800tonCO2/年 (無施肥)

